澁都洒美選

完

特別
へ13
3633
26

澁都洒美選叙

雖江北大都會未盡倡家遊戯之態於簡篇者有年且喜雛妓小髮之属流行之時佳言以貴様比大瘡衛聲之最墨者朗風誘引而萩寂乱自呼通名之妓謂諸於職松波家之然瀬川調字家之丁山類波奈扇生之遺愛存於遺于本家聲不減而至今時見者生踊躍甘心於此君而澤尓

特
内へ13
號3633
巻26
昭和二十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

竹林有文人其名曰喜三二不敢終術
隱文於當世爲帷作根祖帳中有書
得之朋誠堂矣猶得魯論於昌孔壁中
不復喜慶哉名謂娼妃地理記弔此篇
次則譯国字以告同士其餘言言盡唐
人懷古中矣類葦有誓花扇丁山瀬川之
類又於武寸満津巴紅糸衣半夫之
巢天上調字之詞不古之古古之不古
混爲一古不可必泥矣三味子通者生
一座之笑消炭

鷦鳥之類嘗聽倡家之繁花千未聽伎
出樓中語
情有誠事焉余戒曰爲小髮追使爲雛
妓莫必出大聲而呼向之人也詩曰螟
蛉有子蜾蠃負之此謂也
乎空言始惣領太郎月鼻之下長日
志水蘗十著述

台閣西之隱士

市北集書
蘗十亞四

ゆゝしき義物金杉のやうに世をさけて芋
をひさゝるゆゑ一日畠のいもをほらんと
するみぎり三味線の音あるをきゝわゆゝし
てこれをゑるに一書の出をはゝり其書勿
論竹簡にて家やてけるゝ篆のとゝ皆
斜斗の文字なり退てよほん同士かゝん同
士のともがらと活毛彩の筆をとり濱町
流のゑふみを以て一帖ののべ紙ようゝ

さるはよこれを開せれど郭中あるをゆ
家主の掘炬よりも甚しゝみ闇の秋も此
里ぞうり月夜よ雨よ雪とゝ花とせとゝ
紙の糸とゝ人ぞたうゝのゝ拭ふ紙学ま
掠奪のゝをゝをうゝひゝの枝をつゝ
ねてゝゝもあゝゝもそゝらざゝわや

天明三年正月の　四方山人二月碎の
ゝゝあゝゝ　筆を寫

嚮よ月成氏ら娼妃地理記を見て京
にそゝわ地理をさとゝり今又夢十子ら游
都洒美選をきゝてんつ天文をゝう
ぐるゝ一寸さゝれハ闇の夜もより京斗
月おゝれハ名にけて月のりゝゝゝよ
とゝふされと五町の谷野ゝゝゝゝゝを
星のゝゝくの抵灯ハまゝゝゝゝゝ星の役
不抵灯よりも大きく見ゆゝゝゝゝ

大ゝん出肆伝ゝゝてんて未ゝゝゝゝゝ
樵木よゝゝて有頂天下の巷治み
ゝゝあて烏呼月成硯と墨とを断
ゝゝよゝゝゝゝ燕十ゝ巷さゝ抵世界
を出ゝゝゝゝゝ是ゝゝゝ

朱楽芳江

梟択ぶ明けても巣を作らぶ三年
塞四手めも明うぶさとまやみ
せん翌手み米色とも見せた見
せんハ見せぬ乃ないぬ知うく作
うぬをいうんと云がめくるるつけ
ゑしぶゑめゑしと呼ぶ乃通記
ちるを今年やハんせん来る手や
見すると六手ゑ作用

人も作りしや作てで勘ふの役者
陪ゆたるの初りも陪く紐ゑの切
さ川て紐米ぶ紐ゑ乃切栗と柳と
の半ゑく今手ハ見せるるとと
ハるりぬ手ハ出ゑの各ゑ知ゑ
で前弾をちゑ川ゑかぶとてう
るるて曰むをれ本のおるの切り
ふふ橋穂しく作者ゑ穴ゑ

脇ふしみ記

妙妃地理記乃後者

物くさみれ不あんど

福井藩

吉三二

凡例

月本國の風土其外後學寡陋ホい爾扁なる
て是を知るべ困くハ等低よのせずと旧記よ名
不郡の名物替り是移りて增減とれありくし
くい徊見集ゆ見くく知り後よべ五列其ゆ中
よ一名助の大川ありとれを思ひ川と云古おふも
思ひ川恋の志ぐらみせ紀とあてと云づりり此
川を魚ぐろ魚よ右川方川と云事旧記の如

所謂五列といふ

△江丁国　十五郡　△二丁国　九郡

△角丁国　十二郡　△京町国　十七郡

△新丁国　八郡　外に新地三郡

右を五列といふ中ふも二丁国ゑどの家居も新しく別の名不奇羅あり其外云もさらに絶景いろんかなし

江丁二丁を合せて江前江後といふ京町新丁合せて京前京後といふ

△衣紋海　月ゑ西へ寄る日ゑ人の帆の衣紋を垂て故に衣紋海と名付昔は凡五里御といふ澪本有り今は枯て陸地

△大門灘　月ゑ国第一の場所あり関所をもくて往来の女の出入こゝ絶いまむ新造花魁等ゑ客を隔る情なし　かぐぴーそるふ及くらけぐとくられく利刀名なふ

△中之潮　海船波海の大漏あり或例ゑ高波あり悪い揚秋とろろ又ふろのせいはゑ高ろ名物なふ

△揚屋満地　今は名のみ残り左右は茶屋商人しまたーー多く入る者の位不となる

△水道尻　むらーは天神かーとといふ今は月ゑ西より日ゑの陽ゑ家をふる構あり

△西河岸　凡十八郡わどあり

△東河岸　牧丁角丁二丁目の横通り合せて凡十郡程有り

△伏見潮 凡十八町あり

此外に

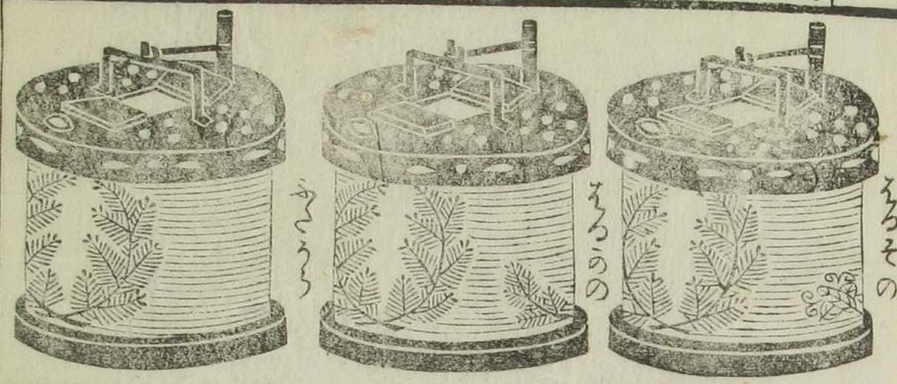
△九扇堰嶋　△茶嶋

△商人島　△羅生門嶋　△蛤小路 凡八町あり

其外に深草のうづまかさねく名り作あり

又に其彩くの風俗あく朝ナどの遺ひあり

それに金の生糸ぬきて格子でいちやはひてえんゝ穴開々



江丁國石川之名産

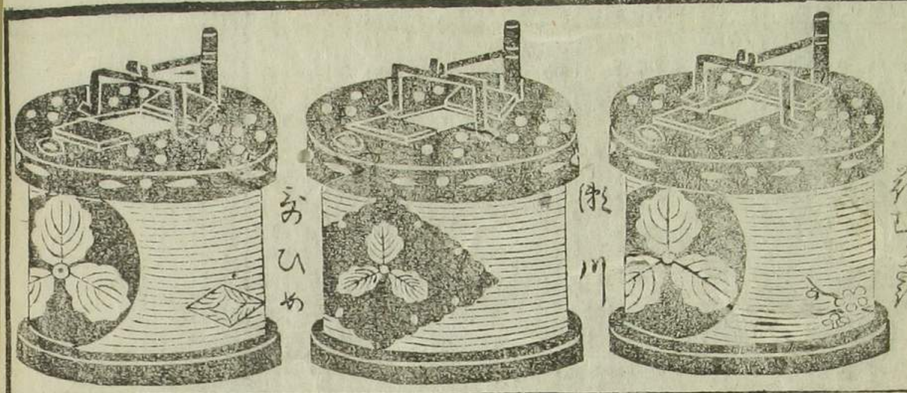
○額勢郡

△そろその　其たつとく光りをみりの表の伏雲ゝ春山如契とうりたてゝその其の糸いとうさかし梅の後揺のうちけ桃の文くたる姿いとなる色めたてとうり次ゝおりの表石又巻

△そろうの　子代上と限る松也ふよりに表よひうれて茶代の茶松のおそに茶こどうの未たのこある野分の風京あり

△ふさうう　長而辞

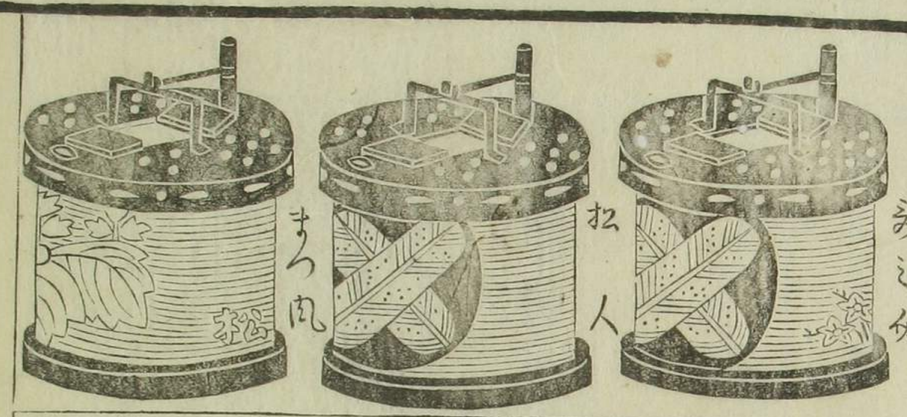
ふさう浦の汐干ふ白ふさうう貝



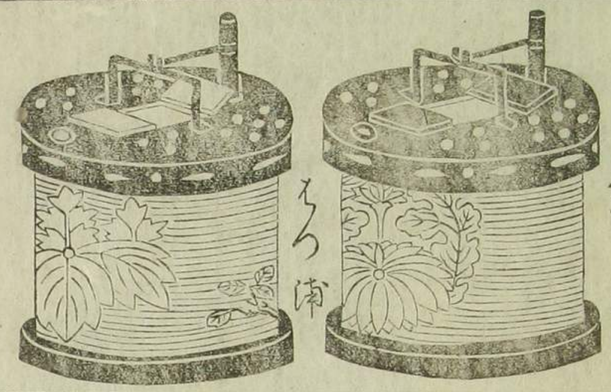
○松葉郡

新の名所雲の位乃名よめでゝそる砂
の青白よあるる

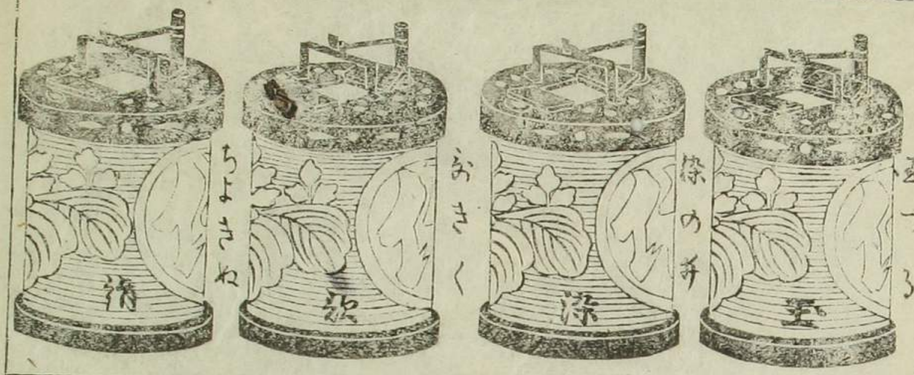
中みを洗ふ。萬客よ勝まして花茶
のようりひ。むらちみゝこうをまして。
古今乃色をみく出瀬川のれんきあく
よ。あつうる程の義ありゝて。塩みても
平の湖みも。万客こ捨をせうゝんん
も。辛ひめ乃このく乃筆のこと
ありゝ。なゞ乃みうきそうよいかくゝも松



松の葉乃ふれ一面ゝあわつきいろ
を乃卵乃よきあ。の彩よつきせあ。
詠ありゝ松人のそうてもそて
まきのそうゝあがきあ乃。ちこと
ありゝ松風乃平みも名ハ高砂の。
まつ代のあのしも光ゝ来ゝ
人ゝの船昌うめてなき。名名
をえる若葉乃だいゝんのもゝ。
あゝわて生かさけをかゝ行へ
や。今ハ仔を封乃を。これハまつそ



の金盛乃風和とらん一まり寸
うつくしや其名所の松乃色とく
をあらひて「新造」抽き長られども
通るぶ世とて「通」知も色とわつ遊
君の國ぶれいつまでも客の徳よ
そろうそれそろはよ意喜てまちち
ヤさんと「花里」の津川なる拵牙
のぶ舟よりち茶うてぶ松び風よ
まろをつそろ乃うつき「鴻」
うそろよりく



○竹郡

△玉にそる　春雲似鶴と式彩の沢よもれ
拵ふ袁へ井小同生及幾ふとせを繋ぐ舟頂
の朱よりろぞ名拵藝を嘗袁の羽うさ
れ子秋の枝をなりされ拵君ら代の国妓と

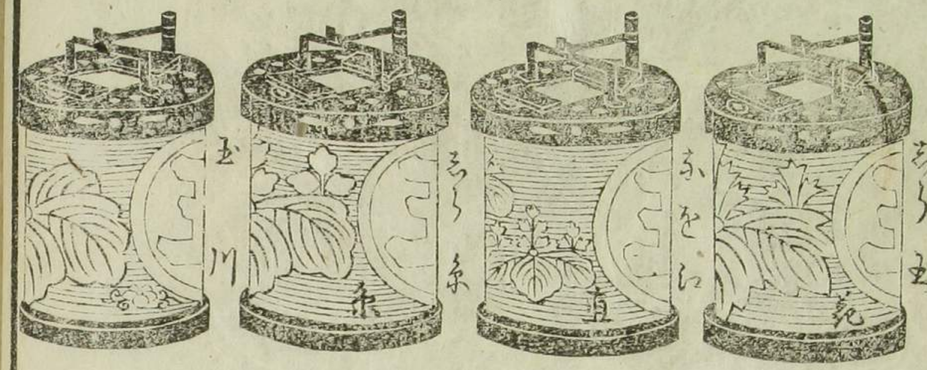
△深の井　追而評

〈君ら名の蒔よれのひ分深の井乃
よろのなけや あふ名ろせん

△おきく

〈かうぞ れよに葉うくー菓の花

△子代清　追而評



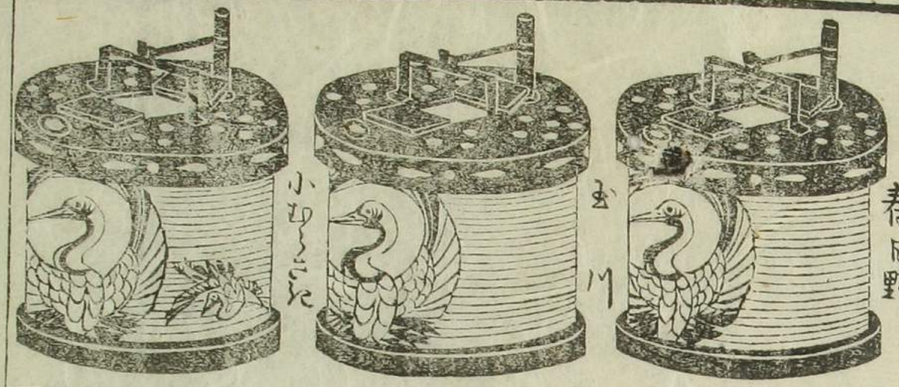
○弥玉郡

△きく玉　むかしくの名男左京さんもきく玉げのそとくの向ひ一ぱいのと名へ一ぱ事いの嘆くまーかくさんと山玉を面幸婦絲玉と名付られーとや

△直　江戸をくさる江戸むくさるやたおやめ

△きく糸　深りゆそれくーも山糸よりえそーなる美綾のけちあくよれそどにおーらふれーむらくいふ色の人茶ちエ深生されんことく

△玉　川　直而評



左川

○角玉郡

△かもげの　左五中れもかもげの里にくふかいよりゆそ伊勢ちゆ浦が玉ー物後の美端女十姫の情深ー乗美い是評

△玉　川　青楼六玉川の一つく外の花乃名不ふーて公姫の白法ふ川水ゆくく美藤之

△小むくさる　いを紫巻ふ山のくさそそそくるる如く山深ちをちくひまくる人神ちとふく鳴る如く山深ちをちくひまくる人神ちぬりのごとーー紫式部も如者なく山のくさ楚ところとふくかくかようひまくると名もよいとせーゆめるくんくら

△花むしろ　花ハ畳りに用ハ今まゐれをのこ
ゐるものゑとむうの度を今の俗云花を人
小ちく何なゑゝ紫のゑを人の名にあて情
を深上ヶ花と紫と花色お對の物さゝ外ふ
へおらかゆめの名産ゐるべゝ

△玉　笹　むくかゝぞゑうゝず深ゑ世
の蘭生の生れともふべきゆにゑ風ゑく
その葉なうどうす国の雨ゐつゆりと仕く
ゝ一日ゑ

△うもすゝ　長而作
名もそれにあて後ゑし色始

△そづもと　やまとゑハ雲の上袴ゐ葉
のすまでも云出ものゑにひとゝく計ゑ
乃もとゑハけおりてよゝ和学の乃ふもく
らかゝぞ未の学もかゝゝさゝゝハ西行法師
が未の学も計なさけのゑゝゝぞと風差
なゑ位後成にゆせとおりゝ併いとかゝ
ゆゝし

△垂　うゝ　君子の徳をあゝいもとかゝ
うゝに云ゝ如く計浦ハ花安にして和
琴のゑゝぐハ雲凡ふかよふ人のゑゝ後雲
みふたゐる花の八ゝ格なゑゝりゝゝぐゝ
ゑるべゝ

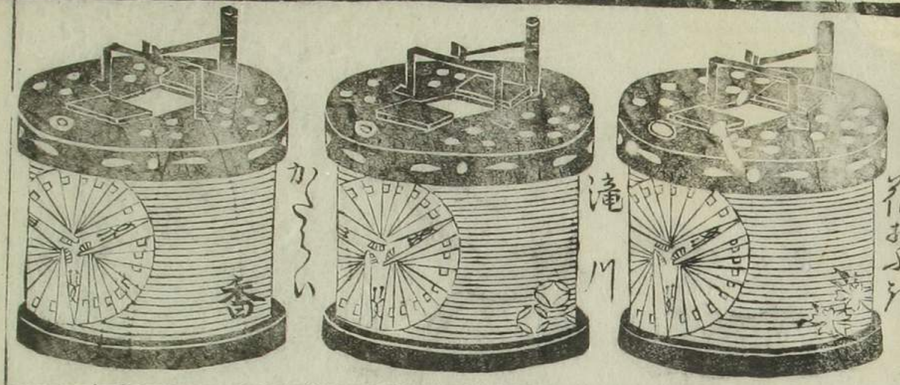
○美濃郡

△この川山　その山なりて姿へびるの山を
そさちをろるとかさゝめくゝ山の姿殿の帯なる
の白むくも点よりづる風情へ

△苑　野　山壁へ苑へ苑へ苑へ苑へ苑へ苑へ
仙よ宗盛公のムをけられゝ女の苑よ
へいふせん苑の姿もおゝ山れと
あきゝおろまの花やちるらん

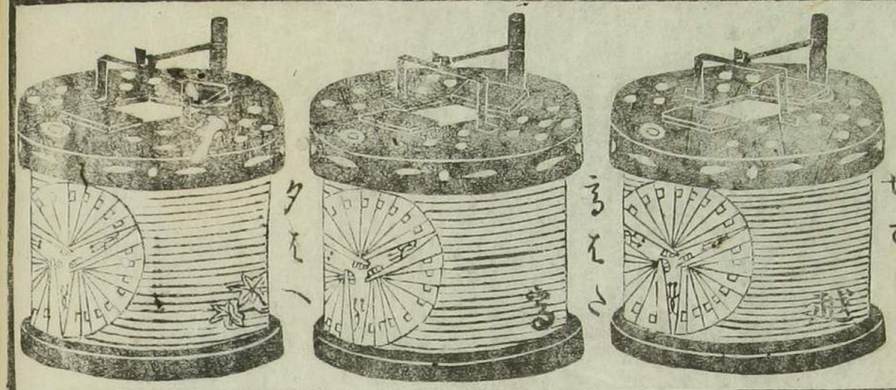
世尊孝り恩愛の縁あるよゝおのムまて
ろゝ紀を知るべゝ

△子代川　長而評

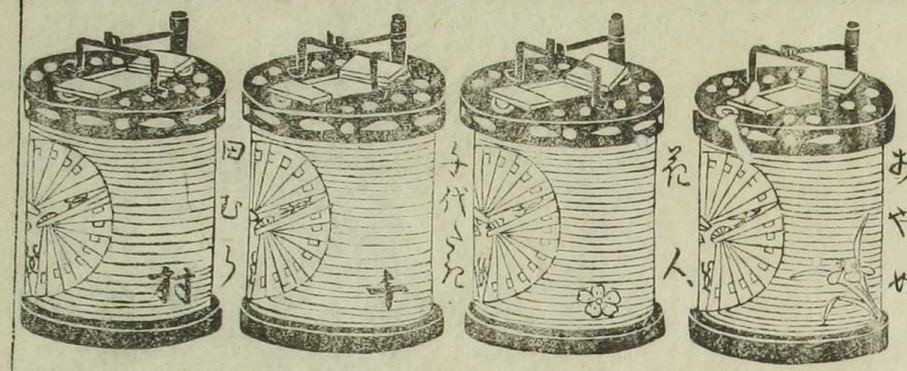


○扇郡

今ハ昔夜叉の文道とゝ通人粹仁帝
の御宇条内ゝ時大通御云金有云檜
扇云ゝ合せて伊ゝ短冊のゝうかゝ
をゝメく楽てゝちゝ山ムを判形せよ
ゝゝの勅定あゝと波されゝ極ゝゝゝ
ゝを引けとゝ能くゝれゝゝいゝやゝゝゝ
の拵地でもゝゝ花の舎ゝれゝ札をゝるゝ
なゝのゝゝきゝゝゝくゝ小思楽仕くゝ漢そ
の文よ回ゝ風をゝゝむ枝ゝ未よ亀ゝ伏
筋よ紫ゝ聖人のお袋ゝゝ揺がゝゝ

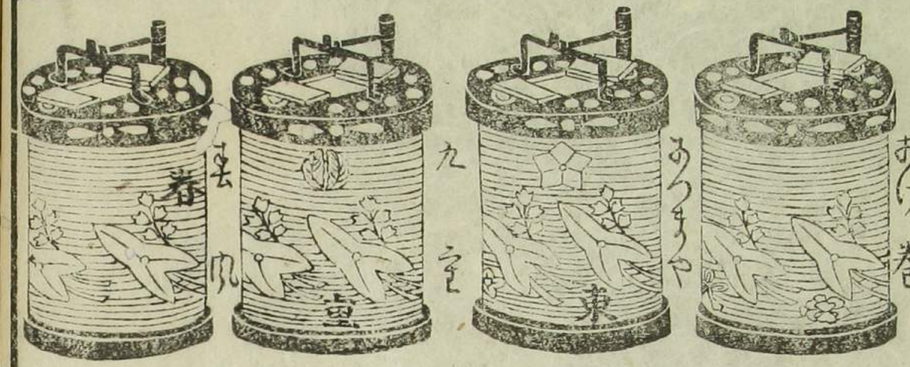


云中たへ紅葉もようしくへ杜若もその
あとへ其角花の五良七ゥ文とゥいみ
の人麿の如く首を云わつ〳〵かんく〳〵
ゑれば芭風をれ〳〵むぢとゑへ業文ゥ国の
やりびかぐげつと係〳〵今の花あゑた
末よ亀とゑゑよせろゥ滝川伏竜よ
祭ゥへ国の扇のかさゥい聖人のお供ゥへ
孟子の機をれ〳〵めたねのゥるゑさ揺ゥむを
云ゥ〳〵ゥへゥれ花人ゥゥゥゥあゑ〳〵りゥち
もよゥ〳〵くへ夕日ふゥゆゥへ夕業ゥ杜若
をゥその亀ゥ似ゥりゃく〳〵花あやめ其角
花の五良七ゥゥ大数影越雪とゑゆゥ



亀くこれ十越ゥゥてれをゥゃせゥと陽
までのぐをゥあゥぐゥの動答亀仏云
もおきれて皆く出ゥと思ゥれを扇
のてゥちん数をてゥ〜ておゥさのおい
らん右方方ゥれゥとゥゥたもしへ千
の字と村ゥいゥ字ゥ班さゥゥゥゥゥんゥ
めくそれもゥゥく居ゥのさゥこゥ扇を
ゥゥちくし〜て

子代さたゥ亀むゥとゥゥゥゥゥゥゥゥゥ
あゑゃ人ゥ仏ゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ
とこどゥゥけゥしゥゥゥゥゥゥゥゥゥ
ませゥさゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ



○松金郡

△あけまき　此糸の毎りくふして源氏又心糸によるものゆうかくにと貫之ヒ吾妻袋のひれを濃ねを鍋方の大振袖のあげまきなどゝ出さる糸様を始く極しち今に俄のはい磨うるを思ひ出さ人多し犯云奇語よ必六ろせりふふくれとも日本武尊さく吾妻やあしと云ゐんしたれいんを花いむとくら九宝小假名でやうくゞ数金や思ひの糸

を染つるさんさて元とゆゞのひつるも多香をたれのとれと木よ糸を玉凡とふし敬而ヤきんそるいノウ
誠よ此糸かどんその昔大糸あり
磨ら初て帷やくろと出と笑へしい郡のゆまれとよべし今にあつまや九宝乃中れ激の瀧をよくそろ出ますそ
ごふりとわ糸多も拉玉の玉表他さど
たとういうんや

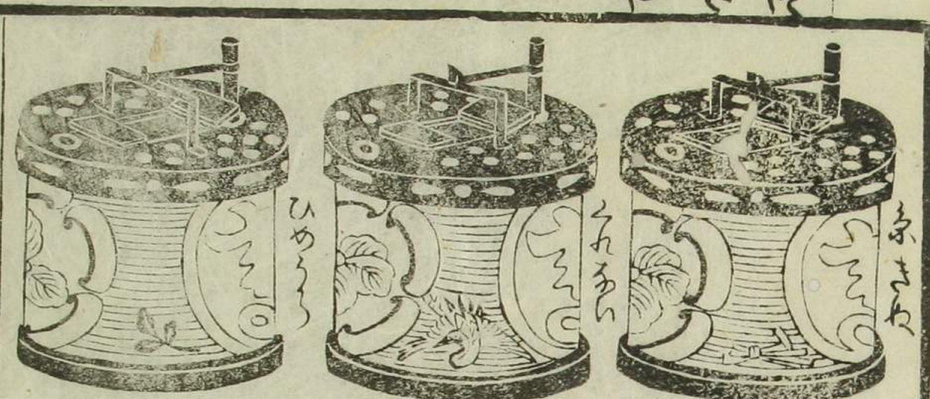
○佐万郡

△松しま　月華國之糸の一つく十八云宗雪後霜一ゑ年久雪中涼雪の実のなきかうを惜をふくむ顔雲に思ひ乃胸をたゝすいと丈んとあた地名と

△糸　山　山山をるくもふくかるる人とし花れおをんぐくべ一糸山嶽とうてゑ乃出と古紅文ふもうくうり

△てうし山　長而詳

山の名も錦をそあよ於田姫



二丁國右川

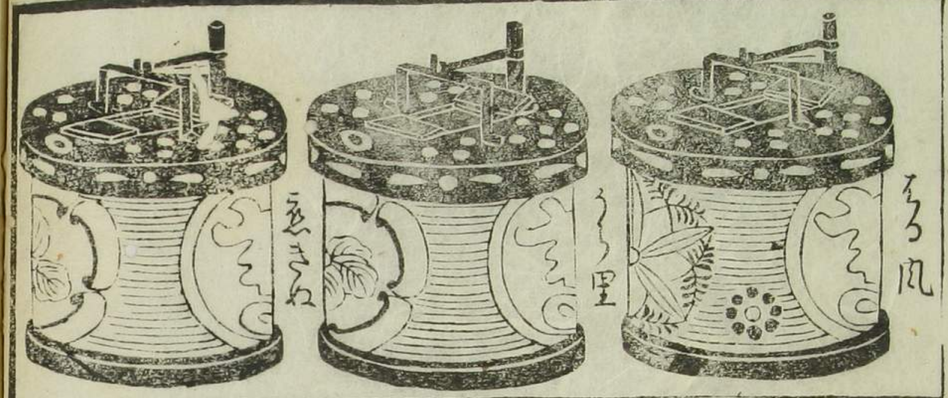
○角蔦郡

△糸きわ　いと中まうくうそ基のあさとういとかくうくれく巻の糸うむろげたる糸の長くしれ糸なきねくつぐる徒糸もかとりの衣のんよかとのひとあたのうつり香をきさうりぐへしるるうくれめのろ

△ふれあい　山保久をわめたるあよ

宿れまる茶やのむらいもちや若川

うくふれあいよ人世をひくとん



又素見長羽織五言絶

紅色秀乃思君　焦塗木履
流眼愛持貌　鬢蟬顔黛粉
朱唇如動裙

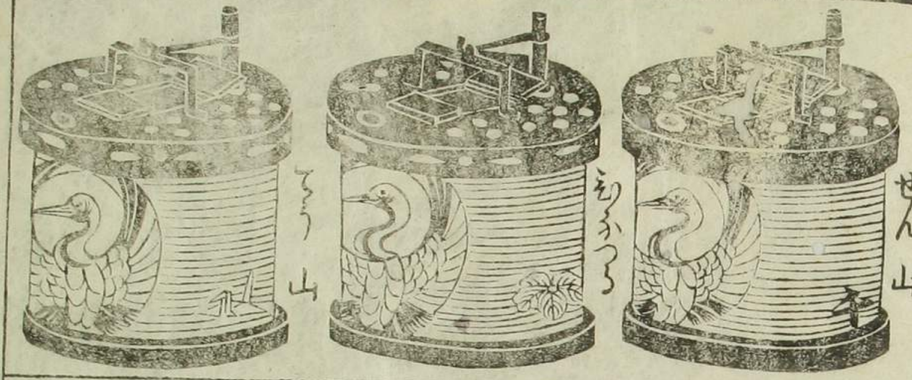
△姉うゝ　廷而評
△亥きね　廷而評
△ろ凡

〇裏凡や狎の袋をまもれうゝ

△うゝ里　廷而評

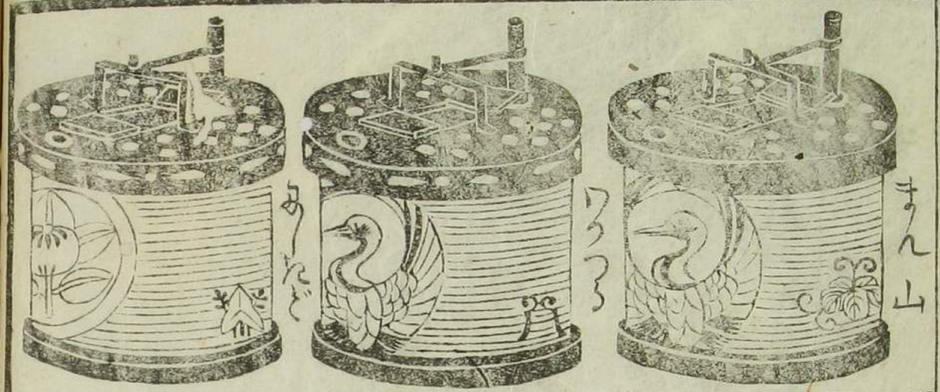
評曰

糸衣ぬれるゝ海てひあ海てをくさし裏凡ま
吹せてうゝ里うて後ゝ織ゝ亥きねとあゝんゝう

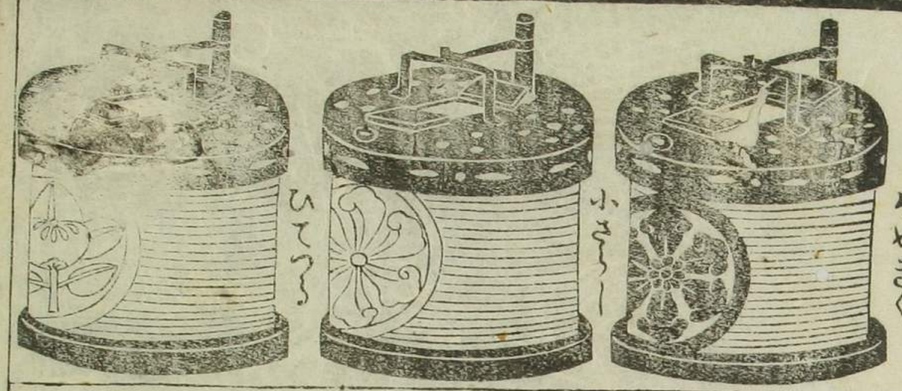


〇丁子郡

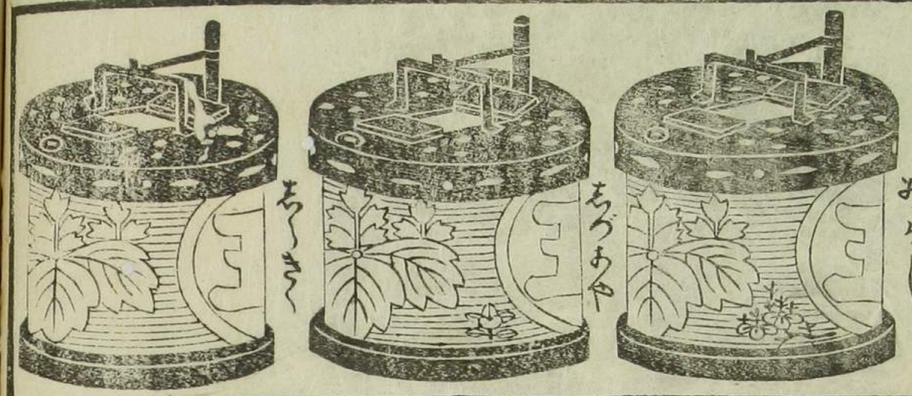
△せん山　山ゝ山ゑくゑんそうしよく
立直の落よいきぢをさぐく後よ南及
の揚のこぢれうゝ山ゝ物あうせ乃ゑ
小四位のおれうゝ凡ゝうの爰とつて
よみといづまろまさるといくるんを
〇うゝあやまれよ待ろるゑつさ乃
ゑんゝ後の爰後伊のとかうゝん
法事只ひの海ろる是ゑくれをいの
△ゑふ歌　糸衣のうに爰極ひゝ
ようゑゑもなうゝた雛の海安世戸乃をさし



て田舎の老衣和尚の浦辺のあそびも
なりと思ひやれば国の思ひを添とく
〜遠近のたつきも知らぬ山中よ
花ぞかろかるくも咲る事哉
△てろう山　白雲のたゝんそを八幡
弾を去めて細き腰をめぐるその伊玄宗
皇帝も琴よ楽て山里へはそこびもお
つるしかぶ揚玄琵ろ箱入の振袖よりんろく
後よる色ろ朴反ろけて空をつたるんもろふ
△まん山
古今ろるに伝の引ぶ之ぶんと感得ぶ



△ひろ　〜あれをよもれたる田舎のさーあぐろ
思ふんのありげなるろふ
あのんをろんぐ河井の流れなほぐー
△ありなし　何つさ雲よる和琴のろくぐ輪古のふをこ
まやきふかこー弁の琴於ろ居ろろて扇
花の家帯雪琴上に和ふるもいろんや
△かめ菊　〜月秋いさろをのんの浦あれと
雲井の秋をあぐも哀した
むろーくの帝夕ののろの浦〜紅狂山のとた
久ふるる狂女の後ーあく今もその余風ぶ哀
小そふ
△小さろ　追而評
△秀つる　追而評



左川

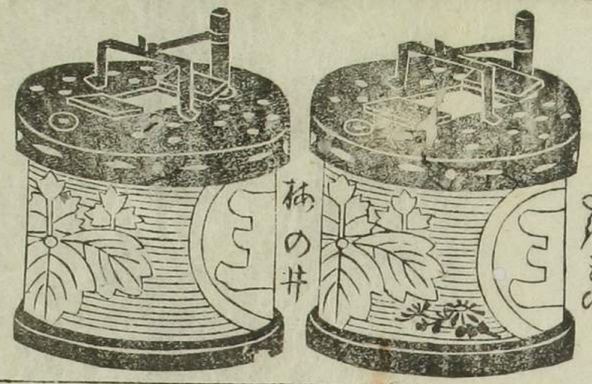
○静王郡

朋石巻る長秋の花紅紫ようへそこなろとあくちげきろとうたしもむりあらず人たといふ毎かゑ侵もりめくと秋のおうが国で爲ぶ帰まで咏つけと和あの三神もきろひ毎りめろ

△ちごあや　　遠而評

△ちぐさ菊　　菊紅紫かと折ちとしたりと義好らいしもむりあらず答あわたる風情あり此花をわたる白よ

〇元日のかざしへ菊乃ゆろうかか。



△たきこの　　枝折の物語よりの果ろうよ

通人此花のうめて情の雨を浸んそ

嘆ぶ屋のにまてえよろれれば問よりさ

きのころうとうよ三人の童子之出物をも

いろぞ獅子は活てある此次の花を之

てさ出をむうと遣ひ宿人も毎よ

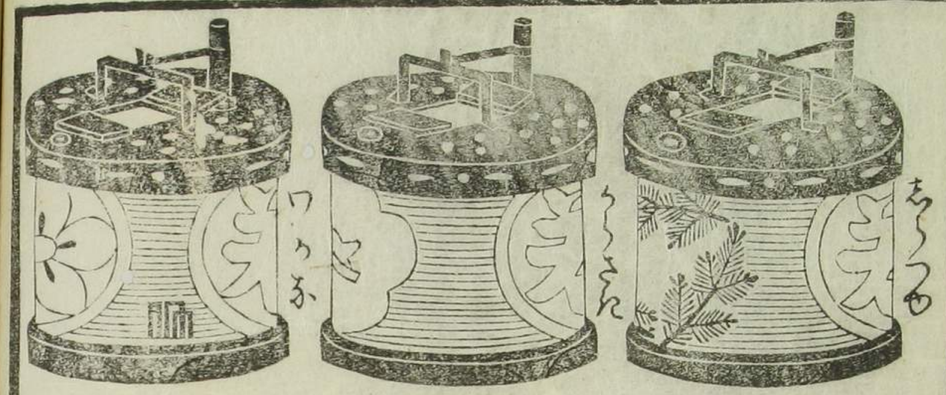
あり久いのざ又七之八之花はさけど

もうといよ島の巣のえくあ来ろ 祝冊冷ド

〇七之八之花のんをかくあの

寸乃ろまれざまあるぞうれしを

△梅の井　　遠而評

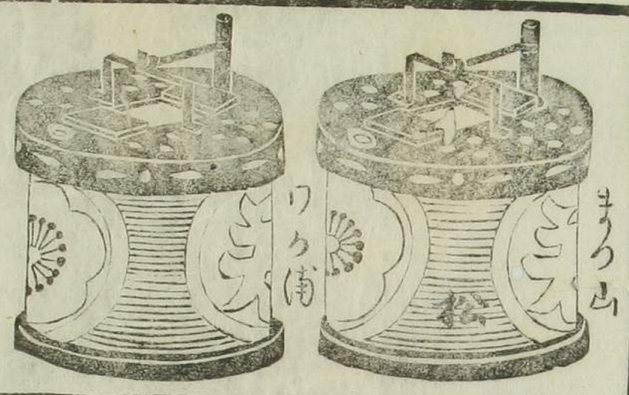


○若那郡

△きくの　玉川歌く姿ゝきく風よりも
ゝ風俗いとゝさなゝきくもを菜のふごう
よ深ゆへ深よ君子のゆておそひなるん
ゆひ菊よ春の時の花さ不　洛云

△かうさん　松の月ゝ種ゝと桃青翁
のはまさゝゝ似ゝく種くゝと蛍の月いと
可蛍ゝ種ゝた夜雨のゝつゝと仕ゝとを
きくふのゝ

△ゝとゝか　七社の門の高上ゝそとゝ
ゝけ山郡の菜の花よ金芝蘭の花やを
ゝ我衣ゆよ雲ゝゝ君ゝけゝ



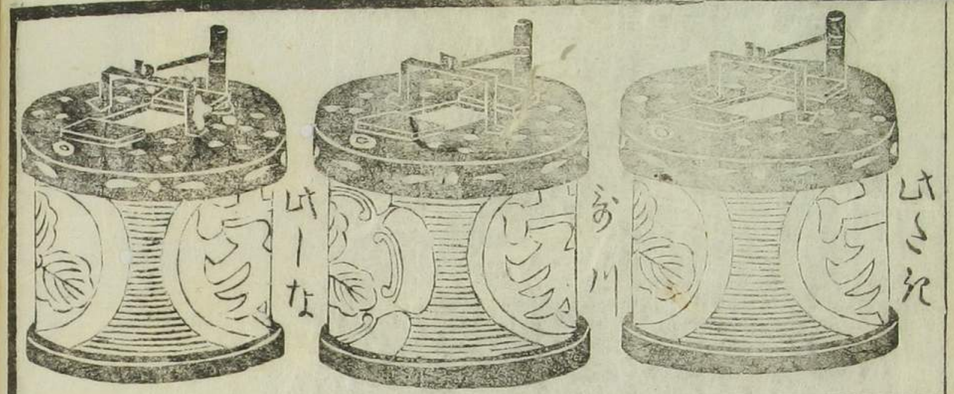
きのめして孝行天皇孫さ大裡の
用事ふんふゝ

△まつ山　蓼云紀芝の名よめて
末の松山浪さゝと契り侍ゝざり
山の景色ゝたくし

△和歌浦　洛小筆の仮名書ひゝゝ
くゝく蓼ゝゝ浦も尋ゆ人多し

風泳和詩

その新さ人要のゝゝかゝ　みのゝかさゝとゝゝわかぬま
向ゝ柿とて芝ゝ定役　對の発光行のゆあのゝ



○家田郡

△山たき　水後水雑家染出とろう
うふさふも子瓜せー如く澄の水を吾ちつうふ
仕くこー大和云公任方のれ秋の末ふ
澄の吾ハさて美くちく云ふれと
糸そ云ぐたてふ行きさくり

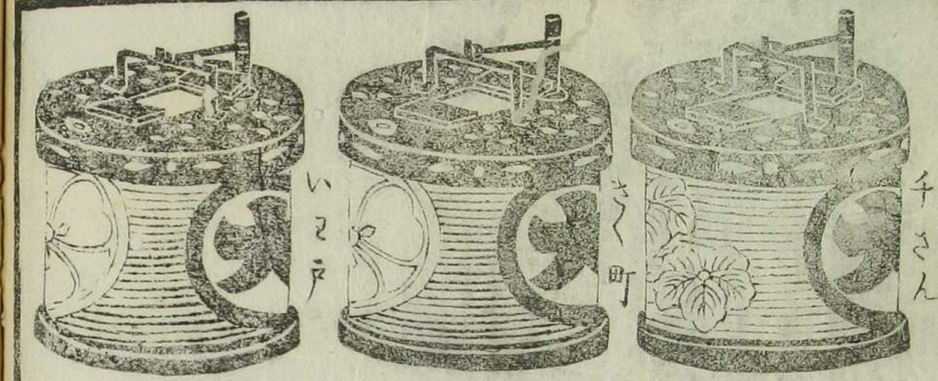
△うと川　水よ画ハ教うくようもる
なれハ思ハ人を思ふと憂ー姿やさー
くハよハ七布に君を麻せんとふんを
せの保れ祭りあり

△山ーふ
〜云うえの山ふくふるの花

角丁國右川

○山口郡

△山ふえ　山花ハむろ石と仕ておむくく
いとと言ねにふーの花あひらーく山吹の
きよげるふめでー橋諸ふ云も山花を見ハ
山吹流ーの云ッ役を可附山新ふと仕ちう
やめのむふ花大格子ありた香久山とふえ
山まり風せ秋くちう菊の盃を送りより
月見の宴へ盃を送る初りとありね山口三浦
△なうくと江戸ぶーにつうれーも山花とうも
△花てう　〜図両もうたくー秋の二夜月

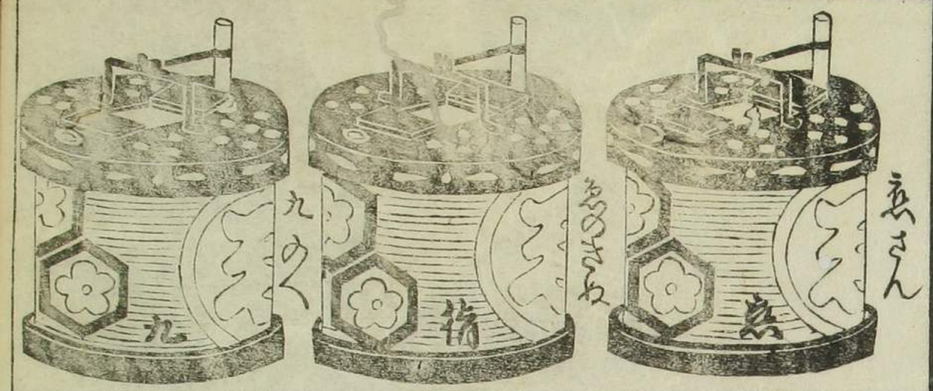


○大九郡

△せん山　黛の名八青海原小島とつゝ
れし如くその山のかたちたをやかにてう
ゝくしし

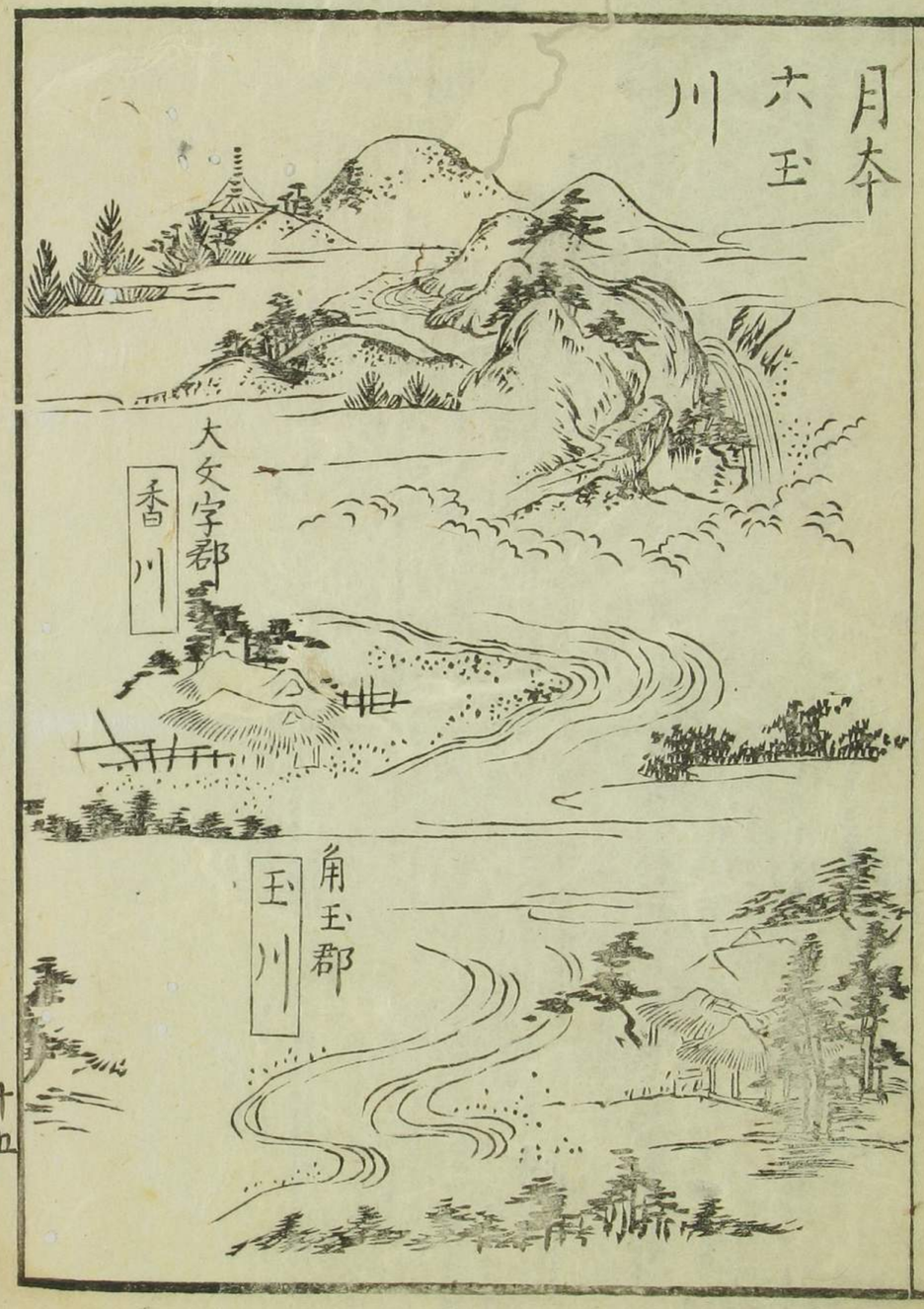
△菊まち　長童ゝ昔七百余歳の菊
酒盃花の名八夜八菊も色きくも花
かし名香の雫の結原

△いと戸　天の岩戸の余風愈都菟
麿（えぐ）辞の伊八三ッ櫛よ名ることゝどと
さよの長時を長くかゝらむるハむ色
も今も長乃名ふしに遠ふことゝかし



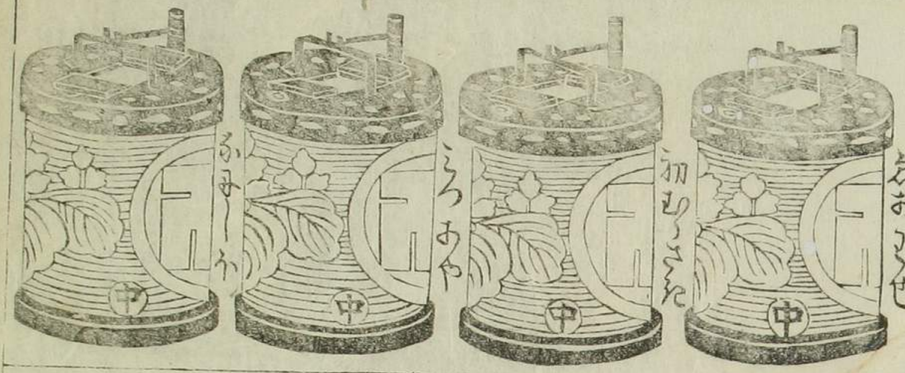
○大鰭郡

△きん山　長の山路の名の実思ひの
坂の玉ぐこハ山山ゆる人いきもはき
りんよりも長の振を待玄名月の中法
おさしし弟山の振紬峠を出され
ゝ様よ行村伊勢ゝせいろゝの山をゝ
さみさん
△名のさわ　白云新ゝの絵を入世のふ
ふりのとふかしまと云ー姫君の河絵
ゝも及びかた衣の名箕よかけて張
さゝべうゝ貝の人長よかよひよ元鰭
地とあるべし

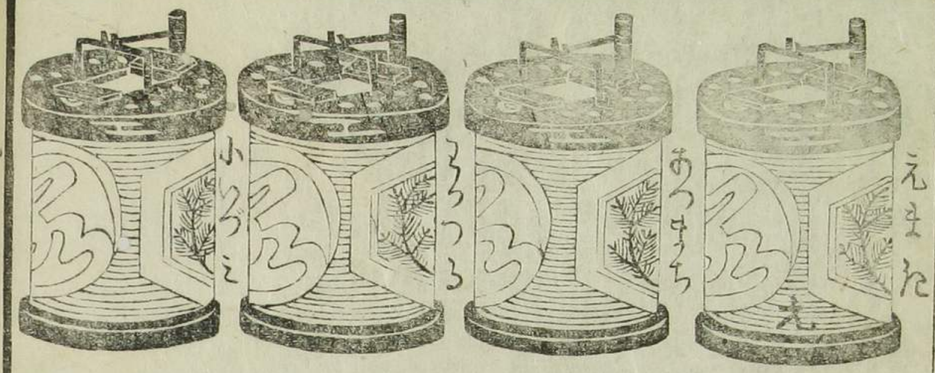

月本
六玉
川
大文字郡
香川
角玉郡
玉川

大俵郡
安川
本巣郡
世川
丸籠郡
瓦川
扇郡
たき川

△九　室　ふ九室よ白ひめる花
の姿ふ系良の花の余風後京あ
ろ　ぶ
△そまきさね　逸而評
〜侯広あ〜まぶ業陸る九ふ月
△ひろ紫系　逸而評
〜業子も雲ゆよ侯ろ九つ
△せん　山　山ま山よ弦田姫のう
くしたを織出を山の端よ弦月の
ふぐれ出る風情雲よえぐらふ姿
あり



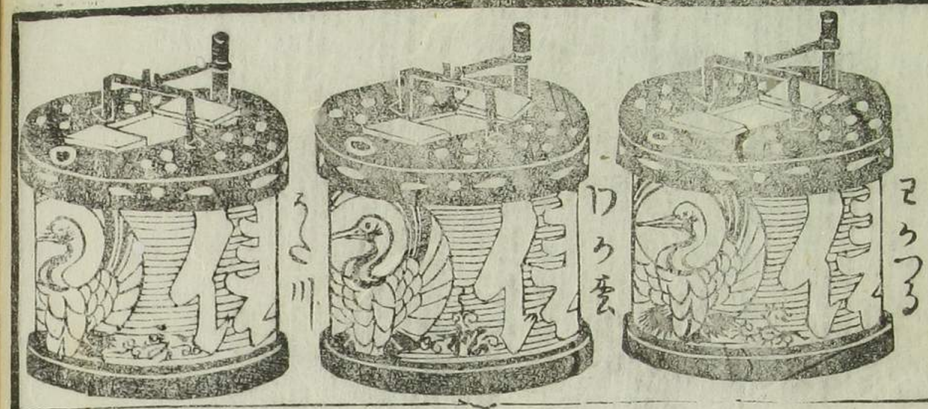
左川
○中万字郡
△後おりせ〜後合の業ふ及ある紅の花
△ふり紫〜業ーく由ろそあり色よ花
△ろあや〜ふ子よあやおりかく溜
△ふろれ〜ろに小ふ花ろうたふ稼ふ
太につの後系逸而評山郡よ享保の
法玉菊といくる金盞の花あり茨ろて
後今に及月のそろろいふ系の為ふ
ろよ〜繋琵琶（びわのいとことつふく）弦と詩のふを思ひ出
そふ地ふを今も山ふ捨れるをたーむ
古句〜ろろふれたま菊ろる茨訓



京町國右川
○若松郡

△えまた　かりつるの弱と古今ふも
優し如くんの弱よ記まれとも不く
花の本よりあぎたらび揚も船らふ浪女之
△あづまぢ　花のあづまとは山をわあ
たりしも橋姫の袖の香ふめでし神
代の色人のはは今に山地のあづまろ
ちげの白々まいるえ名く書もうつし
△美つる　長而評
美まつるよ美美うれし初日の出
△小ぢを　やそうつく称なまつめの

をと優し物名ふ浪八重の美世容の
面をふてこたる浪もあるろ乗安長而評
△姫あや　後撰八錦帳の粧ひ姫色
衣のあやもとその打くの織糸より美
うきれ深出をさてと名ふ
△名びた　長而評
其名さく名びきの松や初子の日
△ひろ雲　長而評
巣懸ハかさけの雲や百　夜美
△まつ山
△美の井　安名示長而評



○大俵郡

△和ろ形の弱　ひろハ目出度栄あるふま
してやや茶こどろの赤なのりを白き羽
紬のあやこぶりもやさうふハ文字風流
の戦云ふ曰一ふ俵やをふまくさお職の
とりあうと未詳

△茶まのい　雲もこどろの葉あれを
今一しその色をすを姿我子代子
の葉ふ俵ふくよ

△高川　六玉川の一つ長俵
きよ元　年く栄く元お俵る
うくしたその枝をふくにたとくを抽

元の高を八重桜の白ひようつ柳
の髪ををたくしたるごとくかんろ
△元ふく　長而俳

〃　猗扇をかさす左近のさんふ引

△たち元　早蕨の巻よ元の香ゆま
ろうとの白ひも橋ふうねと昔思ひ
出さうと書しに遠ふを紬の香のか
つうた式部のみよ近くもやさんよい
表でとふよ紫ゆかしく表てよう
まさ近ふりゆをとの泊みあしう

左川　長而評

○園本郡

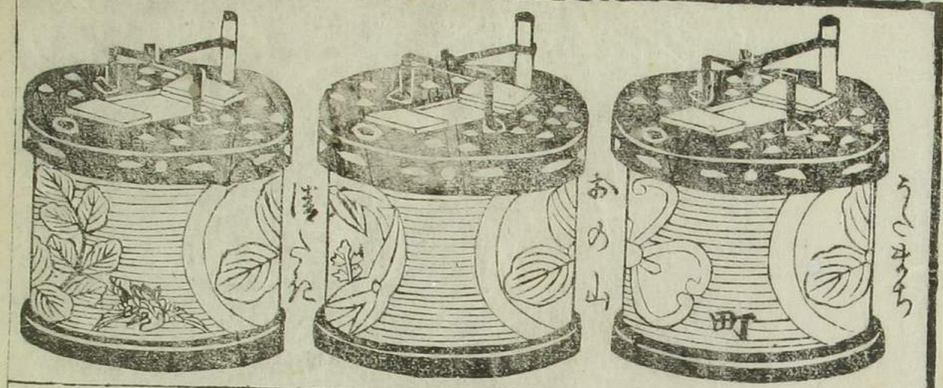
△まきの尾

一名ふりしのを云うた
何れもりしの水をまきの尾

△錦本　子来ふつめるとようしも
山類より云う思ひの深水をうつ入たく
うちのれくのくいさ知れぞ多ふ文
字物の書切よりとの名のそこひ思ひ
おまりて河やさ〜

△あふさた　長而評

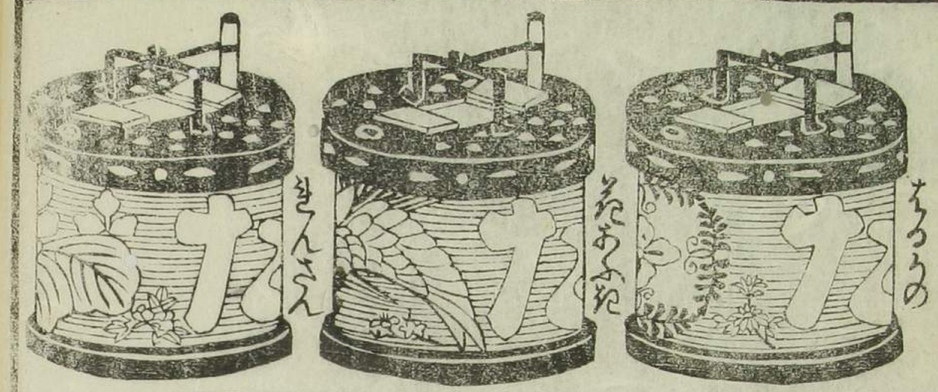
一説ちハ小町ち市所のかとうよる



△おの山　見ぐさの山名の尾の云
ぐり尾のうつくしかとちハ云の山
踊の名ちるともいふ尾ちろ

△あふさた　あふさぎるさのかよひ〜
のちげたい謙よ名のとくにようろ
一説の錦あふさぎるさ中女郎花

△きよさた　清滝登鯉魚変六龍と
鯉ハ云のことあるろ山水いさろくちづ
ちろりかの耳をきよめ〜許由ろむ
かしも実あるろ誠ちろ地名之



○額俵郡

△きるがの　春の野よりそこれつこふと
こしつきこの野をあつかしこ一枝係よ
りるとと古今集の野をきるてんもうつを
ぬうたりは野よりいでて出るるを忘
んの奥羅よりやめる姿あるこそよ
き女ありとは花要えもきろひ通
人ざね

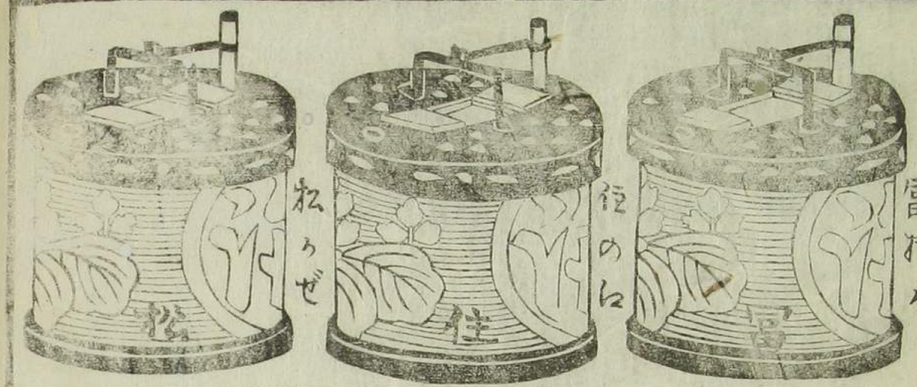
△はるあふれ　俗俗はどまれのりのれし人
うふ〜〜花山やまぐりてえの出不
は白小て伝事をきるぐし

△きんさん　長而評

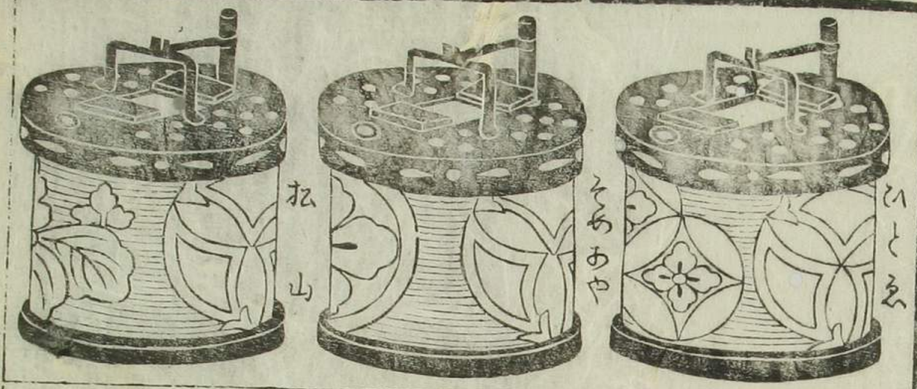
○九鰭郡

△名川　後のとはろれを後とは
昔の碓会ふ〜山彩の名産はまふも
及ひ彩後の姿とるとりけてるこ
世年秋は彩りめ俄の彩向皆ゑこの
桐の役而よなりて中の衆を見の
如くふ仕さるは山後の地あるそや
獅子の若彩の彩いさまりく女を
美点数よ仕ま〜は日年三廊の一ツ
明味御江彩彩昌おいるんのさく
あるぐし

△まるれの　長而評

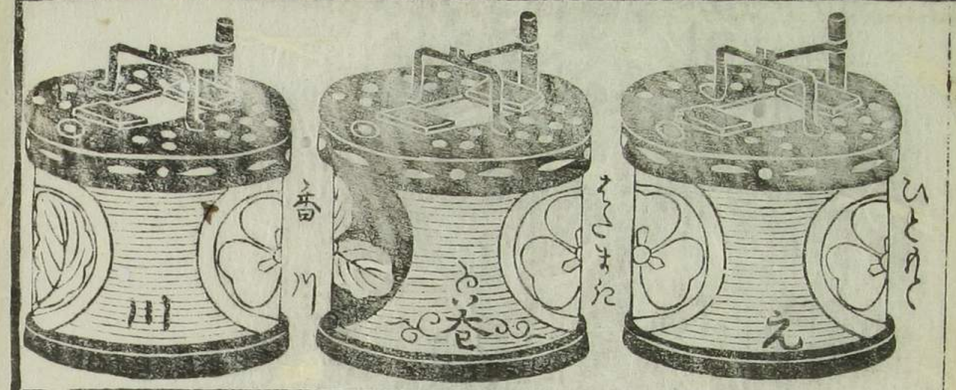


△あり〻ろ　意しれ人いあふ至系と
にぜさそ〻中れの多好こそれい他ぎき
えそれろわれあろれ姿い名とり多乃
数りの姿ともいえんろ
意しきさいえ花よ原えの牡丹ろ松
△こそれろ　長而評
△さそこのくやそこのくじ
春の牡丹よ多系さそこのくやそこのくじ
△まろ風　長而評
落梅曲舊脣吹雪その姿



○小松葉郡

△系と系　花の姿あて中ふ〻てろ
にくし吉田兼好も花いひとくあろ
ぞよれとい〻しも思ひ合せれ
△染あや　地役ろろろ〻し衣役の
系こあ〻しいあろちの玉で見れのろこ
しの越王の思ひ者西の方よ系居
仕さ娘ともいえんろ古ふ
染く見よあやの初りけれ人も
ふぐろこそ系いあ中〻しろれ
△まり山　長而評
えと
玄冬素雪のふれろんを也



○大文字郡

△えとりて　長而評

〜ひとりてのみいけうるてさうも

△ちさまた

〜ぞのやうかお若もちさをきつけて

ちうさんさもろえの軍学

△香川　花香川の渕渕へ船ろと

いくど山川の浪のこいうたえの浪もたて

ぞ和ぞのの浦浪ちつぷうと海外のふ

しなくやちうるへ六玉川の其

えとうの地あるろ

△袖ろ袖　舞殿の冷袖凡雨凄ろ

さうと毛唐人の戯言も所ある訓さぶ

袖ひちてむそびー家の情もうふ山

そでよ他生のちんをふきんをもふ

△ふさあい　長而評

可毫さと丈いくーいをうさやれい

実よふさあひとりふうぞあうろう

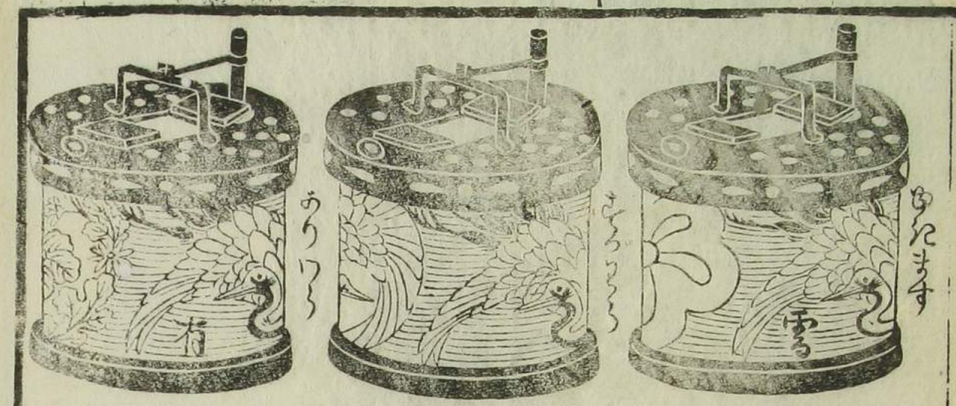
△いさて

その花いさをー　と云ぶ

代のあまめく次安つぎくーしく花よ

ちくうち水小位地もは云をちさへさ

らんや

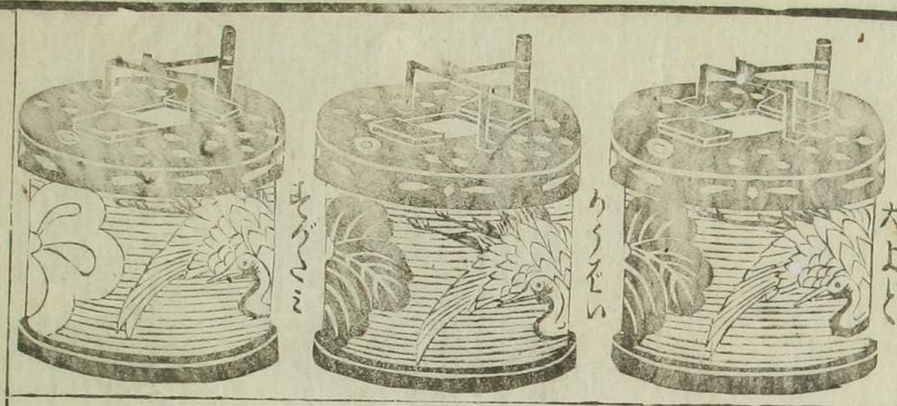


○鶴郡

△雪まちて　清水初言ふ簾をかゝげて
えんさる公妙のゆゝ紅梅よ廓豊年の
業くるゝ本舟よ花を咲よりいづれ
を梅とゆたくゝ白ゆきやと玉敷の
白よりもしら郭の全盛雑ゆゝぶゝさ
もなし　古詠よ

雪似太夫飛繁榮
人客情来待誹諧

△そぐゝ　好文木の赤紫さゝ倭ゝ
ゆゝ　ゆゝくゝく欲道ふもゝゝかゝさ
ゆゝしい祢ゝけていゝゝなゝれゝゝ



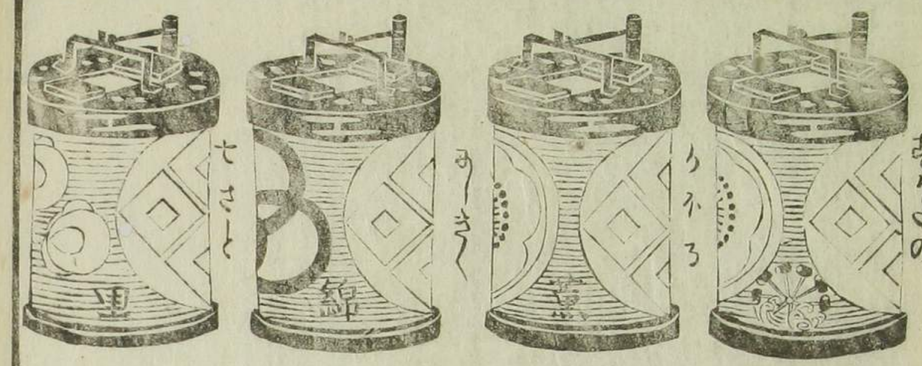
小出雲の妻長評

△夜ゝゝ　寝ぬる夜の美をゝゝか
くまどゝめぐとあゝ昔男の哀ゝ
ゝさゝくゝゝさひゝゝゝれゝ其ゆさゝた
ゝ美ゝゝよゝゝゝんゝゝきゝゝゝむゝゝ

△大よど
△うゝでい
△そぐさこ

各長而評

長評の姿を花とゝつる弥



○四ツ目郡

その役不よ梅の匂の詠とも

小八章

一陽の春ゆ〻しく紅梅の花ほころ

簾か空の山茱萸よ

〻その花のそうさの姿一向ふ梅

いと中ふの花の春の世未よ八文字ふむ

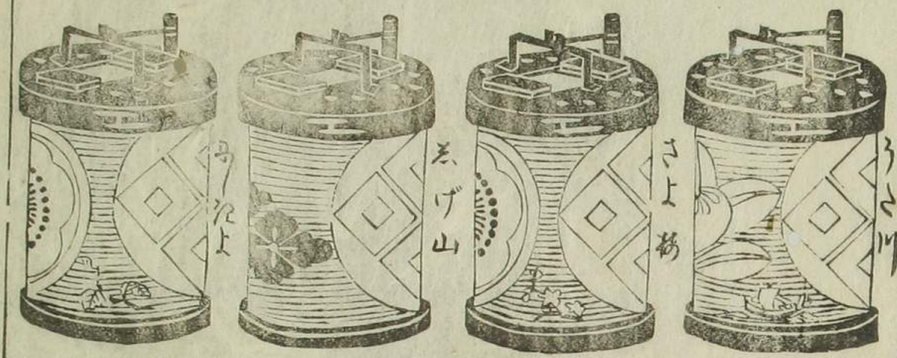
姿名んよ世さしたのう

〻春風よかまめたうもる香茶見名ゆ

いづこも春のいとうしたを

〻梅。本をうふとうゆる〻梅とよこ

梅花常雪琴上飛といふんを傳う



〻七。さ。く白ふ行幸の梅の花

いとしもかしとしとあり〻にそぐて

〻ふ川いつい巻宿梅のふかう引

清水鈎ろいろ〻を思ひ出て

〻母抗よそのさよ梅や俺月

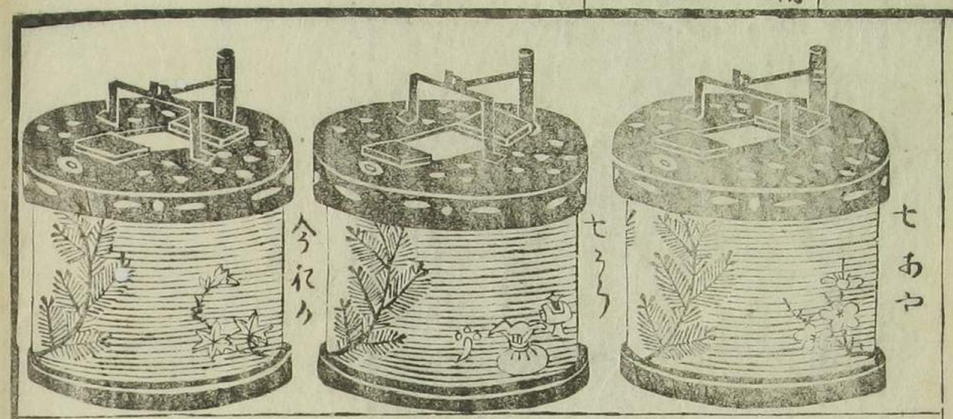
南ひろいは春の花の木枝をたくし

て植〻と女巻をとり五〻て

〻見波せる葉山ぢげ山梅の花

〻ゆ。き。よの梅いあやかた思ひ月夜

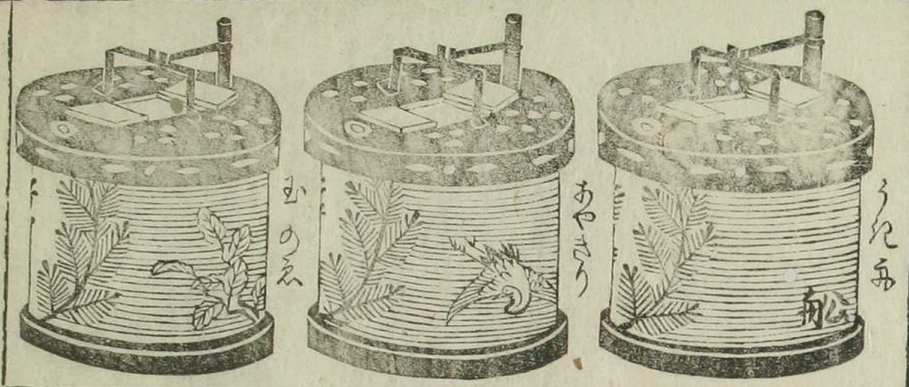
六八章いづまし讃人ちうぞ



新丁國右川
○角金郡

△七あや　紅葉賀巻ふ我もうちかくらいなぐさめんといふ
くうちかくらいなぐさめんといふ
如く山あやゝそうちかくおかくら
へで織女あてゆふいきづたゝした
さてゝうさぐいかうるべし

△七うち　うちわうえ疫よげふえ
ゆるとゝ中ゆの妹の人のむそぐんと
を思ひしらぬ人のゑ拙よ浦波ら
あるハ浪ゝもゆるの浦もゆるうね
うん

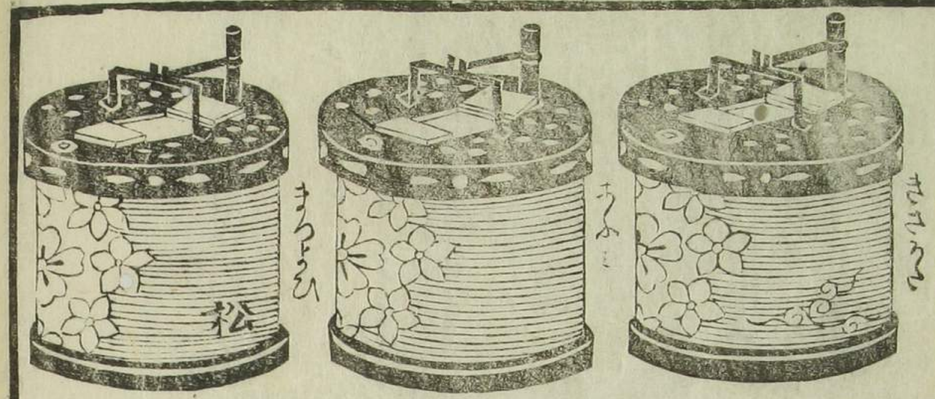


△今れう
岸の今を盛り乃景の四よ
ゆのうるゆやをかめるゝんざく

△うれ角　川浪ゝつりと仕くこの
角に寄る人多きと徹よ紫式部が
その巻よ委のせうり略之

△あや　桐
思ひ並図扇もそこよ桐一葉

△むのへ
一双玉手千人拙その兹長而評

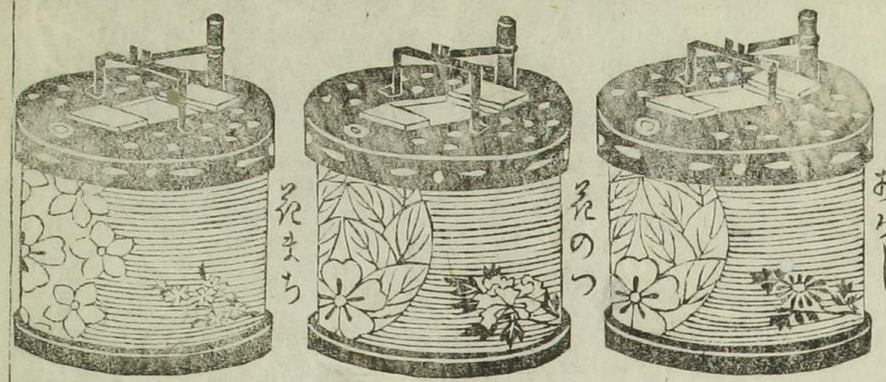


○大菱郡

△ささろさ　土佐日記よ夜へい孫ゆせぞ麻姿まをたしふむとえしもやさしれ枕二りのあかゐる人ゆふ亟ひ路乃ちげくふるまとゆ待

△おふこ　笑流と焼しゑ麻地俗の古事退而辞

△まつよひ　待よひの夏りかゆの夏きけいあうねりうきのとりいりめういとよみしより待有待後といようひつさんたり今もりりうずおのてまたえ世さしくあゆこをとこふ人ゆさ乃

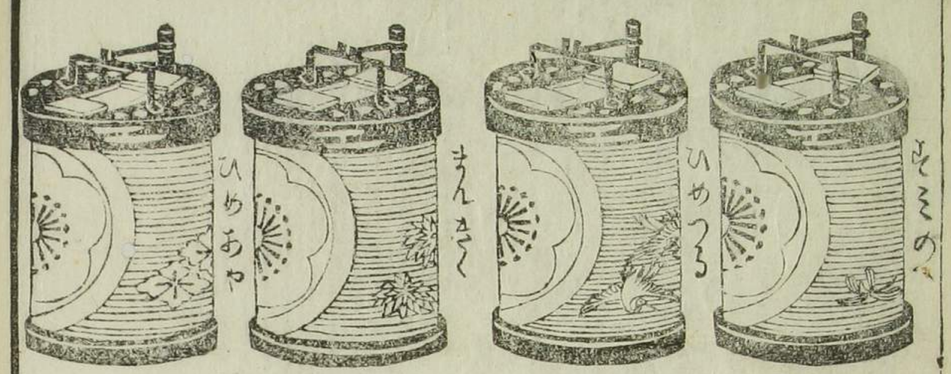


義人となることを希ひりし

△あらし　退而辞

△花のつ

△花まち　花の咎りハ色至よりセ十余日と吉田法師う書しもきろひ通言花のハ乃色をも者をも有る人ぞ初るといふ侍て梅拝度江春乃あしたより梅を暦の色枯まで乃れの去ぞまれぞうれしれ



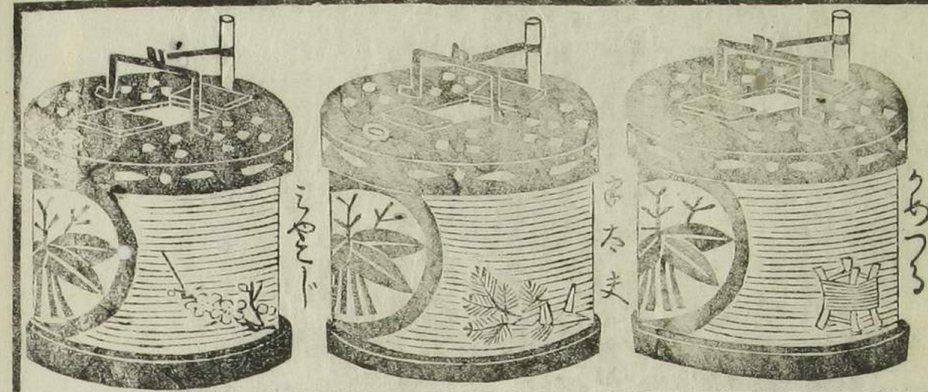
○桐葉郡

△位の江　岩よりる浪夜つさくうつ
ゝ花ふすまてや夜くの送りてぶ
さ紅粉の色をかゝぶ後雅の霜寵
をまとゝぶず疫まゝ花の位の入江乃姿
岩ふよる浪の宮の色ゝ褄西縄の
うゝ毎に粉ふともゝ云ゝゝ
△姫花る
△まんさく
△姫あや
春日粧をこゝゝゝて翠横小芝るゝ像よ酒
臼の柵の色いづまを伺と分ゝゝ花色不之

○越前郡

△ろくこ　胡角一翠霜後夢と
琵琶の親子のいとうゝ花王興色
ハのよかゝとゝぶ胡国へ流りしん
いきハおゞ代の今に絡る花玉のろ
こゝも人の玉乃色を伺ぶゝそたく西
かゝく色ゝぬ
△九　主　いゝ〳〵の赤色の帝のん
の花をうゝたる伊勢衣浦ゝて小
なふまゝ母さゝく伝ろ
△かよひど
△和こく

西色不追而評



○中近郡

久よめで中近江八景琵琶湖絞
不知火にゆらる

△亀にゆる夜帆

たゞまたくくたる其いみハ
客の名ゑしも中あふこの名

△半夫晩鐘

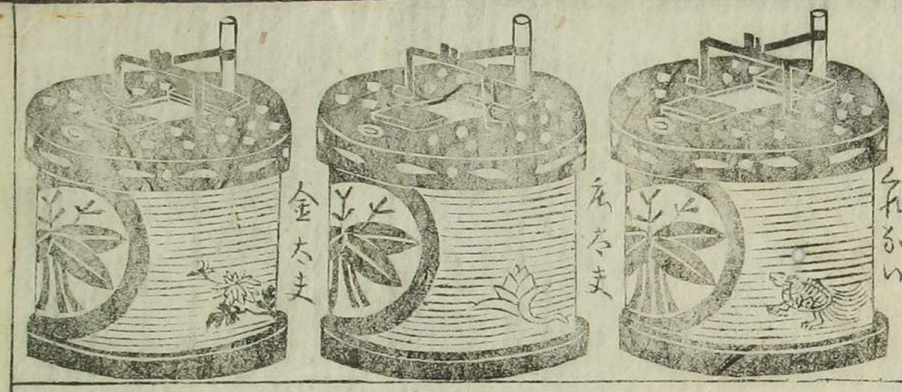
待人よりんざしかけてまたま
ふんふうふうぞ待くわつる

△放鐘雪

これをこやとど某唐も有ぞかし
あゆふみや人の柳乃たうゑぞ

△こまかい夜雨

これかあへそのたよりれてかまをかた
まくるハ子人 ゑゑハ一カ 人



△庄夫落雁

玉まへかりのたよりのそて云紫
ありうさいとへやうぐつるうか

△金夫晴嵐

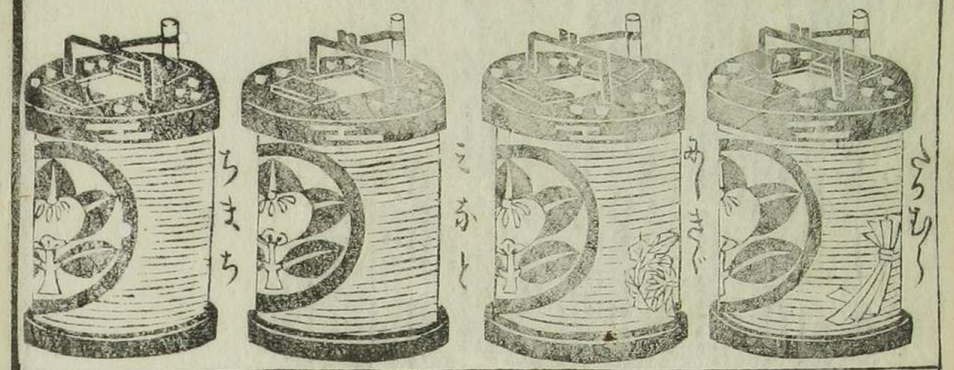
貴人のたよりをきくのわ校よ
ゆかしきこのうゑ〻きえ

△侍妻煤月

匂ひを姿うさちもえふぐさ乃
さいの一てうのかまれものうわ

△子代浦夕照

ちんてうにえもゆう袖の代浦へ
ゑのゆひかよゑ せたをゆう



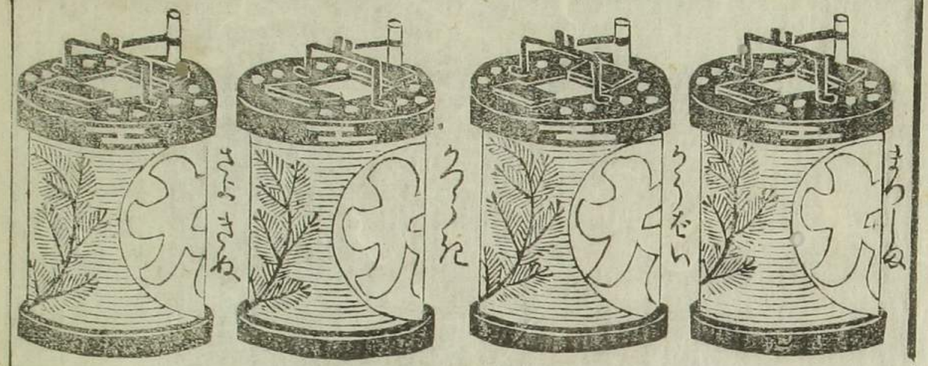
左川

○小松郡

△たろもち　小松宮ゞ書の筆勢の位
今ふ殘りて長くしたゝみの多小茶の
に位事もかあらゝし字是のおよ
[illegible]

櫻　涼　瑞　觀

△みーさご　長而評
△えふと　これて点の淺ともいつぐ
△ちまち　雨ふも書ともたくまるた丹長之
要長評
△千まち　長而評



○九谷郡

△松しま　琴ふ子と世の枝
ぶり後羅の枝をひるゝくしたるあり
さまい天津乙女山松海よ小ゆび
をゝゝくゝゝ瓜ゝ瓜猪伯ゝゝ瓜さ
らゝゝ仕ゝさのでありいせう
△かゝぢい　花の多ゝゝくし長而評
△うゝた　定家の長ゝゝ瓜のみ
初のゝゝ雲くゝよみーホ之長而評
△さよ衣　さふたざるれもさゞゝく
のさよゝゝ山もの古事長而評

○大金郡

△さそこのと　そのうぐれたる硯の海波り
ふるべく初るは墨の多者ハ情のかど
うすき墨ゆゑぞまさりたよりてあど
ゐもせずよれかどにて墨をそる
いんの命毛のちんうれのかどのよう
てんつけともたとへんう
△いろたさ　遠而洋
けたさのいろくえんそん
△そのまた
かくゆゑもそのえべくのまれ拉

滸都西義撰之大意

弘書の茶瓶の例小ゆゑひて碁論の評ハ器服八目弘
以くにハ出仕よ書おくハ〜ね又拙竹の役不相下ハ
若きの中の町の夜の姿を其侍よ人うら如く
剛侍へれいうんよたよりて知らざるを紀一外津
浦く鎌波の山の絵まで也去ふもなうハ使
個ゆる花の江戸の般若業を志うせまゆ〜〜去加く
ね志うハおれど仕者ハ一夏を以く芝を著よて多
足のうく〜茶たぐふ〜ふ〜もあうハ教を清くあう
たゆざうんや我より後小せさうも尼をきく

事我より先ふらへ我隨く順とせんといふ事
文ふ習ふべしたかドナてくりくしいふルぞな
さこ大意を書ふ後序となして筆をとゞめむ

卯そ秋つれそのの素　　耕書堂主人述

後編錦妓諸雅　　定八代扁ょ長而俗と淺し動ゝ名伝
を外ぢなにのれたるを改あらハし
朱ル辰年表ふ紙ふ入おのヤス

四方山人麻惚子作
平家與勘定　全一冊出来
袋入後ハ平家のと
を尚ふ風ふ伝る
面ふれ本く

志水燕ノ十仇
擬問雅話　全一冊出来
袋入後ハ化物を大
色ふ仕立客物くう
をもるなく

新吉原大門口
細見改所板元
耕書堂
蔦屋重三郎梓

い5443